

# 大転換期における エネルギーのリスクと将来

公益財団法人 笹川平和財団 会長  
元・国際エネルギー機関 (IEA) 事務局長  
田中伸男 氏

エネルギーをめぐる動きは大きな転換期にある。  
エネルギーが抱える課題は経済競争力、安全保障、環境保全など多岐にわたる。  
政府や企業が変化の兆しの読み取りを誤れば、思わぬリスクに直面することになる。

## 中国が動かす世界エネルギー市場

国際エネルギー機関 (IEA) は OPEC に対抗するエネルギー安全保障機関として、消費国によって 1974 年に設立された。きっかけは前年の第一次オイルショック。各国が純輸入比で 90 日分の戦略石油備蓄をもつことになった。創設以来、これまで 3 回、備蓄を放出した。1 回目は 91 年の湾岸戦争、2 回目は 2005 年にアメリカを襲ったハリケーン・カトリーナでメキシコ湾岸にある米国の製油所が破壊された時。そして 3 回目が 11 年のリビア危機である。

実は私が IEA 事務局長在任中の 08 年の夏に原油価格が 147 ドルと最高値を付けた時も、放出すべきかどうかの議論があった。この時の価格上昇は、中国の需要急増で需給バランスがタイトになったことによる構造的な要因であって途絶の危機ではなかったため、備蓄放出を見送った経緯がある。構造的な要因には構造的対応をとる以外ない。

IEA は毎年マーケット分析を行っていて、“World Energy Outlook” (『世界エネルギー展望』) は、エネルギー政策のバイブルとも呼べるもの。昨年の 11 月に出た 2017 年

版 (以下 WEO2017) には 2040 年までの世界のエネルギーの見通しが示されている。

注目すべきはエネルギー世界の大転換。世界のエネルギーにおける 4 大変化 (Upheavals) ・革命だ。

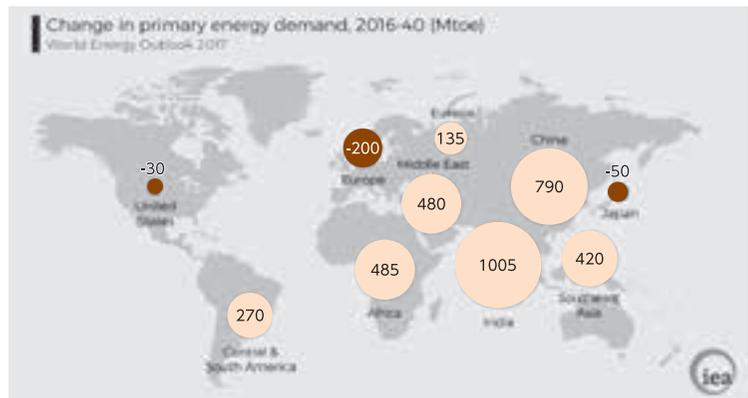
第 1 に米国のシェール革命。米国は石油・ガスにおける世界のリーダー、それもダントツの (Undisputed) リーダーになった。

第 2 にソーラー革命。太陽光発電は多くの国で最も安価な電源になりつつある。コストの高い大型発電所による原子力は駆逐されるかもしれない。石炭・ガスでも発電装置が売れず、GE やシーメンスといったメーカーが苦境に陥っている。

第 3 に中国のクリーン革命。習政権の新たな動きが中国の役割を変える。脱石炭が加速する。

図表 1 : 2016 ~ 40 年 エネルギー消費量の変化

単位 : Mtoe (石油換算メガトン)



出所 : World Energy Outlook 2017 (講演資料より抜粋)